



キリスト教センター通信 第50号 2022年3月15日

## 共感と想像 経験と学習

キリスト教センター長 藤倉哲哉

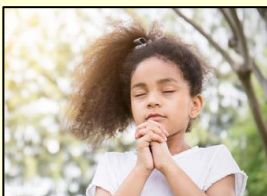
30年近く前のこと…ロンドンの地下鉄に乗っていたら、紙コップと小さなボードを手にした女性が隣の車両から歩いてきた。彼女は乗客に紙コップを差し出して小銭をせがむが、誰も黙って首を横に振るだけだった。私の前にも来たのでボール紙に手書きされた文字を辿ると「ボスニアから来ました。夫は戦死して、家も仕事もお金も食べ物もありません。助けて下さい。」とあった。スカーフを被った化粧っ気のない顔は、幼い子供がいそうな年齢にも見えたが、その時の私にはどうしてよいかわからず“Sorry”という、彼女はそのまま隣の車両に歩いて行った。

また、聖公会の起源を訪ねて大学の一行とヴァチカンを訪ねた際には、サンピエトロ大聖堂で世界からの巡礼者に混じってローマ教皇の謁見にあずかることができた。数万人の信者で埋め尽くされた会場では、教皇が各国語でメッセージを読み上げ、巡礼者の団体を順に紹介するのだが、最も大きな拍手で迎えられたのはクロアチアから教師に伴われて来た子供たちだった。私はその時ただただ胸が熱くなり、隣に並んで座っている学生たちが見ているにも関わらず大泣きを止めることができなかった。

私たちは戦争、災害、飢餓、貧困などを報道で知っていても、当事者としての立場を免れることがある。自分は日本に生まれてよかった、家族に被害がなくてよかったと、安心したり感謝したりするのはよいことだ。しかし、それだけではただの傍観者になってしまう。

人は直に経験しなくても、そこから学習して新しい知識や技術を生み出すことができる。行動も体験も私たちの学びの大切な要素ではあるが、私はいつも、まずは知ろう、そして考えようと呼びかけている。どれが正しい情報か、何が真実か、私たちは何をすべきか、すべてはここから始まるからだ。

かつてヨーロッパで垣間見た戦争は、日本にいた時の報道では知りえないことばかりだったが、いまでは誰もが掌の中で世界を見ることが出来る。現地へ行かなくても、実際に経験しなくても、その真偽にかかわらず世界が飛び込んでくる。だから正しい現実を探し、困難な状況にある人たちに共感して、その気持ちを想像しよう、またその経験から学習しよう。これが私たちにできることなのだ。たとえ「大義」を掲げても「正しい戦争」などあり得ない。「真理」は必ずひとつで、時代が移ろうとも決して変わることはないのである。



## ウクライナのための祈り

ウクライナのための祈り

正義と平和の神よ、

わたしたちは今日、ウクライナの人々のために祈ります。

またわたしたちは平和のために、そして武器が置かれますよう祈ります。

明日を恐れるすべての人々に、

あなたの慰めの霊が寄り添ってくださいますように。

平和や戦争を支配する力を持つ人々が、知恵と見識と思いやりによって、

み旨に適う決断へと導かれますように。

そして何よりも、危険にさらされ、恐怖の中にいるあなたの大切な子ども

たちを、あなたが抱き守ってくださいますように。

平和の君、主イエス・キリストによってお願いいたします。

アーメン。

ジャスティン・ウェルビー大主教

スティーブン・コットレル大主教

